

新井 俊郎

「何枚ぐらい描いたら絵らしくなるのかなあ、蓑輪さん」

「そうだな、2000枚描けば画になってくるよ、なあ善ちゃん…」と
いって蓑輪さんは、絵描き仲間の一人に顔を向けた。仲間のなかには
児島善三郎もいた。昭和10年の秋だったから、68年も昔の話であ
る。蓑輪さんは、私の下宿先の主人で、桐生二等郵便局に勤務しなが
ら猛烈な勢いで、仕事をし酒を飲み絵を描き若い連中の面倒をみてい
た。時々画学生やら、若い絵描きが4、5人集まって来た。絵を描く
ためではなく、酒を飲みに来るのである。

「奴等、貧乏でろくに酒も飲めねえんだ。俺も貧乏だが時々まとめて
ここへ呼んで絵の談義をするんだ」と蓑輪さんは言って笑った。こ
のあと、私はスケッチ・ブッケー冊も描かずに何十年も過した。言訳
になるが、戦場生活と戦後の貧困生活が長かったからである。

1987年、昭和62年7月から1989年、昭和64年・平成元年10月
日まで、約2年3ヶ月、毎日々々欠かさず葉書に絵をかいた。前立腺
の癌を3回も手術して、余命6ヶ月を宣告された親友秋成へ描く約束
をしたからであった。半年の寿命が2年以上延びた。私の画の御陰だ
と遺族は言った。この話は拙著『続余韻』（絵を描き始めた動機）に書
いたので後は省く。この2年3ヶ月におよそ1000枚を遥かに超える
葉書に絵を書いたと思う。思うように描けず何枚も何枚も官製はがき
を書き損じたからだ。この間に20冊を超える水彩、淡彩の入門書を